第２部パネル　分科会 22

生活困窮の人が地域の人々とともに生きる地域をどうつくるか

提言

- 高齢者の生活支援を引きこもりの若者が支えたり、高齢者の食事サービスを行っていた人が子ども食堂を始め子どもの貧困に気づいたり、地域の課題は社会参加の種である
- 生活困窮は向こう岸の話ではなく自分の足元の課題。知ることによって地域は優しくなる
- 生活支援コーディネーターは町の事業者や様々な力を借りて、丸ごとの思わぬ解決策を生み出す

登壇者

【進行役】 勝部　麗子氏　（社福）豊中市社会福祉協議会福祉推進室長

伊藤　まり氏　（一社）音別ふき蕗団代表理事

櫛部　武俊氏　（一社）釧路社会的企業創造協議会副代表

大岩　正明氏　豊中市小売商業団体連合会事務局長

中村　龍男氏　中村新聞舗代表

三好　禎子氏　豊中市原田校区福祉委員会遊友室長

田村　泰子氏　豊中市原田校区福祉委員会遊友スタッフ

戸谷　文代氏　豊中市原田校区福祉委員会遊友スタッフ

増山　志津子氏　豊中市庄内南校区社会福祉協議会会長

議事要旨　勝部 麗子氏

この分科会では、生活困窮者自立支援事業を通じて地域で支えられる対象がどのように地域の支え手として活躍していくか。また、これらの支援を通じて地域づくりをどのように行ってきたか。大阪豊中市の事例と、北海道釧路市音別町の事例を通じて話し合いました。

まず、生活困窮者自立支援法が進む中で地域共生社会についての考え方を整理しました。

昔の社会に戻すということではなく、①一人も取りこぼさない、②排除ではなく包摂を、③支えられていた人が支える人に、④すべての人に居場所と役割をという視点で地域づくりを行っていくということを基調に報告いただきました。

豊中市庄内南校区社会福祉協議会からは、一人の子どもとの出会いから、地域で子どもの貧困に気づく地域づくりを行っている事例が報告されました。夏休み中、ずっとお金を渡されて一人ぽっちでご飯を食べている子ども、生活の厳しいご家庭では、子ども食堂の申し込みができない子も多い、100円の会費を持ってこられない子どもにどう参加してもらえるか。知ることによって地域がやさしくなっている事例が報告されました。

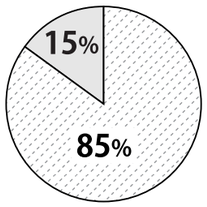
また、豊中市社会福祉協議会の引きこもり支援に協力いただいている豊中市小売商業団体連合会からは、引きこもりの若者の就労体験をしていて、当初イベントの販売のお手伝いで知り合ったが、最初はかかわることに戸惑いもあった。しかし、接していく中で、今では一緒にお店の販売にもかかわってもらえるようになった経過をお話しいただきました。同じく毎日新聞販売店からは、新聞配達やポスティングの仕事を通じて引きこもりの若者たちと出会い、彼らの真摯な働き方に出会い、自身が「ひきこもり支援相談士」の資格を学ぶなど、人生観が変わり、新聞を通じて地域への社会貢献を考えるようになった。児童養護施設などの図書や自転車などを新聞にチラシを入れて募集する等の新たな支援が始まりました。

小地域で見守り活動を行う原田校区福祉委員会では、アルコール依存で地域から排除されていた人を発見。社協の生活困窮者自立支援事業につなぎ、本人にかかわる中で、ゴミ屋敷支援や就労の励まし、就職祝いを行った。そして、彼の死に直面し、地域でお別れ会を行った。アルコール依存で地域でいつもお酒を飲んで嫌われていた本人の本当の気持ちを知ることで、彼を支え地域の偏見がなくなっていった事例が報告されました。

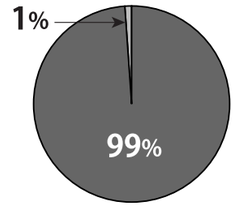
最後に北海道の釧路からは耕作放棄状態だった畑で、昔地域の特産だった蕗を作ることを考え、ふき蕗団を結成。地元を励まし、障がい者や引きこもりの若者も就労にかかわることができ、結果として町おこしにつながった事例が報告されました。

アンケートの結果　参加者概数：188名　回答者数：155名

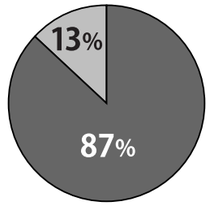
回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方



■ 寄せられた声から

- 地域（支えてくれる人・支える人）の人々への居場所づくりが大事。
- ＤＶＤの映像も利用して参加者も興味深く聞いていた。とても良かった。すべてのパネリストの活力が良かった。
- 勝部さんのスキルが躍動して、多くの登壇者の心をゆり動かし、感動をもたらしていることを実感する。それがなんと釧路・音別まで届いている。でもつくづく思うのは皆さんの成功。うまく活動に結び付いただけでなく、これまでの長い間には数えられない苦労があり、その蓄積の上に今があると思われる。